空蝉 -utusemi-

吉野 圭

目次

空蝉 -utusemi- 1
裏話（かつて住んでいた丘の話など） 4

空蝉 -utusemi-

いつも背中ばかり見せて済まない、と思う。

読み止(さ)しの文庫を机に伏せ、傍らに置かれた湯のみを手に取る。茶を持って来た結衣(ゆい)を振り返り修一は笑いかけた。

「ありがとう」

結衣は声を出さず頷いて微笑んだ。白い頬に笑窪(えくぼ)が刻まれる。その窪みを見るのが、十年来、修一の幸福だ。

日がな一日本ばかり読み、ろくに話をすることもない。そんな夫の後ろで妻は洗濯やら、編み物やらをして過ごす。そして頃合(ころあい)を見て夫に茶を出し、僅かに交わす言葉で笑顔をほころばせるのだった。

修一の鼻をほうじ茶の薫りがくすぐった。また結衣は、古くなった煎茶を捨てずに炒(い)ったのだな。祖母から教えられたという昔ながらの慣わしを守っている。家財道具もなく嫁いで来た結衣の、それだけがここへ持ち込んだ財産だった。

「少し、外へ出ないか」

修一が誘うと結衣は首を傾けて屈託なく笑った。

「今、私も言おうと思ってた」

窓外の陽は蜜色に変わっている。日暮れが早いこの時期、気温が下がるのはまた一段と早い。毎日の習慣となった散歩も、これからはもう少し早く出なければならない。本に没頭して時を忘れるのはほどほどにしなければと修一は自戒した。

丘の頂上へ続く長い坂道を二人、肩を並べて歩く。

表通りの並木から運ばれた銀杏の葉が、時おり黄色い風となって二人の周囲を舞った。

結衣は絶え間なく喋っていた。最近、晴れの日が続いて洗濯物の乾きが早い。この間から編んでいるあなたのマフラーはもうすぐ仕上がる。昨日、近所の農家から大根をいただいた。今日の夕餉は何にしようか。大根をふんだんに使わなきゃ。あなたは何が食べたい？

修一は相槌を打ち、聞かれたことには丁寧に答えていた。そうしながら景色と、妻の表情を代わる代わる愉しんでいた。

坂を上がるごとに住宅が少なくなり空が広がる。

やがて西側の景色が開け、遠く丹沢(たんざわ)の山並が見えた。

紫の影となった稜線から、今日は富士も頭を覗かせ、宝石の冠となる夕陽を待ち受けている。その富士を越える飛行機は燃え落ちる星のように赤い尾を引いていた。

結衣は夢心地の瞳に夕陽を映して言った。
「見るたび、いつも綺麗ね」
修一も頷いて不思議に思った。もう十年、同じ景色を眺めているのに飽くことはない。見るたび愛着が増して感動が深まる。今日は満たされても、明日になればまた夕陽を見たいと願い、同じ道を歩いているはずだ。
幾度、と修一は考える。あと幾度、同じ景色を見れば満足出来るのだろう。
あとどれくらいこの地に住み、君との時を過ごせば気が済むのだろうか。

ゆうべ結衣は泣いたのだ。私たちに子が授からないのはきっと罰が当たったのに違いない、と言って。
二十歳で駆け落ち同然で結婚した二人を、世間は決して許さない。いやたとえ世間が許したとしても、親を捨てた罪が見逃されるはずはないのだと言い、声を上げて泣き続けた。
罰などではない、ただ機会を逃しただけでこれからも希望はある、そう言って修一は妻の肩を抱いて繰り返したけれども、いつもの言葉がどれほどの慰めになったか。
時々、夜になると結衣は泣くことがあった。発作的に込み上げる彼女の涙は、ここ数年、間隔が短くなっていた。
結衣が心の奥深くで夫を責めていることを修一は知っている。愛する人を責めるために彼女自身が傷付いていることも、彼はまた痛いほどに分かっていた。
叫び出したい気持ちで修一は自分の無力を嘆く。
仕事は不安定で収入も少ない。結衣に気晴らしのための贅沢の一つもさせてやれない。将来の生活も約束出来ない。このまま結衣は自分などといるべきではないのかもしれない。他の男といればもっとまともな暮らしをすることが出来るだろう。だとしたら自分が、結衣を手放すことが彼女の幸せに繋がるのではないか。
けれどいつも喉元まで上がるその言葉を、修一は口にすることが出来ないでいるのだった。

「ああ、あんなところにまた、ビルを建てている」
丘のふもとの街を指差して、結衣が呟いた。
「何が建つんだろう。またマンションかな」
修一が言うと結衣は小さく溜息(ためいき)をついて、視線を落とした。
「この街も変わっていくね。毎日、毎日、変わらないようでいて、少しずつ景色は変わっていたのね。今はほら、十年前の景色とはだいぶ違う」
そうだね、と修一は応じて自分たちの十年を考えた。
変わるのは周りばかり。恐ろしさを覚えるほど二人には変化がなく、愛情もそのままだった。失う物がなかった代わりに、増えた物もなかった。家具さえ越して来た時のまま使っている。
周りは駆け足の速度で先へ行ってしまう。このまま自分たちだけ今の地に立ち止まり、

ただ歳を重ねて行くのだろうか。
　朽ちた未来が見えた時、いけない、と修一は思った。
　いけない。結衣を付き合わせては。自分は今の地で歳を取り朽ちて行くのも構わない。けれどそんな停滞した人生に、結衣を付き合わせてはいけない。結衣は先へ行くべきだ。
　やはり言わなければならないのだろう。喉元に留めていた、彼女を手放す言葉を。
「結衣……」
　彼が妻の名を呼んだ時だった。
　冷たく小さな手が修一の強張った手を握った。その手は修一の気持ちを察したように、離さないでと言っている。
「ねえ、私たちは、このままでもいいね」
　修一が驚いて結衣を見つめると、彼女は頬に窪みを刻んで笑った。
「たとえ罰を受けているのだとしても。私たちはこの先もずっと一緒にいよう。あの時、一緒にいることを心から願って罪を選んだのだから」
　結衣の瞳が赤いのは冷たい風に晒されたせいか。修一も風から顔を逸らし、目をしばたいた。
「私、あなたといて幸せだよ。これからもあなたといられたら、幸せ。いつか私たちは嫌でも、おじいさんとおばあさんになる。ねえその時まで、一緒にいよう……」
　修一は結衣の肩を引き寄せ、抱き締めた。首元に顔をうずめると若い花に似た薫りが仄(ほの)かに立ち昇った。ずっと馴染んで来た、結衣の生来持つ薫りだった。結衣を手放してこの薫りを記憶から消すことなど、修一に決して出来るはずがなかった。
「ああ。これからも一緒にいよう。ずっと、ずっと。飽きるまで」
　修一の言葉に、結衣は彼の腕の中でくすりと笑った。
「それは、無理かな。だって飽きることなんてないもの」
　“死が二人をわかつ時まで”
　結ばれた時に誓い合った言葉が、二人の胸に蘇った。

　愛する人とどれほど長い時を伴に過ごせば気が済むのか。
　どのようにすれば、この穏やかで平和な日々を、貪り尽くすことが出来るのだろうか。
　きっとその術はないし、我々がこれでいいと満足することも永久にない。
　ただ生まれて巡り会い、身が朽ちるまでの僅かな時を、慈しみ味わうしかないのだ。
　人生は短く儚い。
　駆け足でも立ち止まっていても時は過ぎて行く。我々はやがて歳を取りこの地を去る。
　だからささやかで特別なことなど何もない、結衣と過ごす日常の全てを、これからも修一は愛していこうと思うのだった。

＜了＞

裏話（かつて住んでいた丘の話など）

これは小説の素材とした、筆者の人生のある時期について書いたエッセイです。

小説の “素材” など置くのは無粋であること分かっていますが、リアルとフィクションの狭間で活動する筆者の立場から必要かもしれないと考え載せています。小説に現実の話など要らないとお考えの方は、この先を読まないようご注意ください。

■陽の当たる丘の家で

二十歳からの長い年月、ある寂れた町の丘に住んだ。

別に何かに因んだわけでもなく誰かを気取りたかったわけでもない。
たまたま偶然にその物件に出会って惚れ込み住み始め、他に行く当てもなかったので長いこと暮らし続けてしまっただけだ。
たぶん本能的に、丘という地が好きなのかもしれない。見晴らしの良さで選んだ物件だ。つまり、馬鹿と煙。

そこは丘の頂上付近、南側の斜面で、陽光が燦々と当たる場所だった。
“さんさん” と言うよりも “容赦なく” と言ったほうが正しいか。
丘の頂上という土地ゆえ遮るものが何もないから、朝から夕まで太陽が昇っている限りは日差しをまともに浴び続けるしかないのだった。
冬は良いが夏はたまったものではない。窓から差し込む陽光は部屋の全てのものを温める。壁や柱、家具に至るまで何もかもが高機能な保温材と化す。
題名に「家」と書いてしまったが正確には一軒家などではなく、古びた集合住宅。状況はプレハブと何も変わらない。いや、そこらの建築現場の監督用プレハブのほうが、エアコンが付いているだけ遥かにましと言える。エアコンなどという高級なものは我が家には無縁だったから、蒸し風呂という表現ではまだ生温い、人を殺せるレベルの温度に上昇した。

言い忘れていたがこれは平成の話です。
エアコンのない物件などがこの世の中にあることを知らない人には衝撃だろう。
平成の世にしては特殊な物件、特殊な経済状況だったよなと思う。
我がことながら、よく死なずに済んだ。

情緒のない話はここまでにして。

その丘に住んでいた頃はよく本を読んだ。

晴れていれば文庫を片手に散歩に出た。木の葉ずれをＢＧＭに、公園読書が定番だった。

雨の日は当然ながら家に籠もって。雨垂れのＢＧＭに囲まれながら延々と本の頁を見つめ続けた。

……今から思えばなんという贅沢な日々だったのだろう。

金はなかった。他人の目には不幸とも不憫とも映る生活だったと思う。蔑まれてもいたはず。
けれど多くの人が得たいと願いながらなかなか得難い「読書時間」を私は得ることが出来た。
稀有なことだし、恵まれていたのだと思う。

あの日々は、人として得られる限りにおいて最高の贅沢だったのだ。二度と戻ることは出来ない貴重な時間。

若い時を無駄に過ごしたと他人は嘲笑するのだが、私はあの日々に感謝したい。

【解説】
二十歳だったあの頃、長い休み時間を得た私が本を読む日々を選んだのは、やはり幼い頃から読書が好きだったからです。

金がないので他に選択肢がなかったんだろうと言われれば、まあそれも確かに正しいのだけど。

幼い頃から大の本好きだった私だが、十代の頃は人目をはばかって本を読むことを控えていました。
本など読んでいると「暗い」とか「頭良さげ」というイメージを持たれて差別されるのではと恐れていたため。
何かと臆病だった十代の私。あまりにも空気を読み過ぎて、心から好きな趣味にすら突き進むことが出来なかったという。

その反動で、人目をはばからずに済むようになった二十歳過ぎから思いきり本を読むようになったわけです。

残念ながら、社会に役立つような本を読んでいたわけではないので、その頃の読書歴は現実何の役にも立っていませんがね。

フィクションにおける某歴史人物のように、本を読みながら「社会計画を練っていた」などということは全くないし、そのような目的で本を読むのは私はくだらないと思う。
くだらない、と言うのは言い過ぎかもしれないが、実利的な目的で本を読むのは虚しいことだと思うのです。ましてそれが文学なら実利目的で本を開くのは作者に対して大変な失礼、小説の冒涜に当たる。

もちろん仕事のためにテキストを読まなければならない状況なら実利目的も当然と思いますよ。
たとえば今の私がそうです。
仕事のためにビジネス関連の本しか読めない状況になってしまって、ここ数年は小説をほとんど読んでいない。

しかし仕事で強いられるわけでもないのに、ただ実利だけで本を読むのは虚し過ぎます。

小説、文学はやはり堪能するために読むべきものです。
つまり純粋に自己のためだけに読むのが本来の読書であって、それが作者への唯一の報いと言えるでしょう。

そしてただ味わうことこそ、与えられた貴重な休み時間に対する恩返しともなるのではと思います。

考えてみれば人生の目的とは全て味わうことにあるので、常に実利だけ考えて味わうことを忘れて生きるのは虚しい。
忙しい毎日となっても時々立ち止まって、好きなことを思うまま堪能した贅沢な日々を思い出したいものです。

空蝉 -utusemi-

著　　吉野圭

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社